
泡沫

青柳朔

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫

【Nコード】

N8962I

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

平安時代末期 時代に翻弄された小さな恋があった。
源頼朝の娘・大姫。木曾義仲の息子・義高。
二人の幼い恋は禁忌だったのか、それとも……。

「義高さま、どうか早く逃げてください。父の追っ手に気づかれぬうちに、お早く」

小さな少女は、大きな瞳に涙をためて義高と呼ぶ少年を急かした。まだ十にも満たない小さな女子だった。義高もまだ十三歳くらいの、子供だ。

しかし二人の間には子供とは思えないほどの切迫した雰囲気があった。

「大姫」

義高が名残惜しそうに少女の名を呼ぶ。その声は明らかに少年のものであるというのに　義高は女ものの衣装を着ていた。

「姫には、父を止めることはできません。義高さまを止めることもできません。けれど姫は義高さまの妻で御座います。義高さまの為ならば父も裏切りましょう」

小さな少女には不釣り合いな言葉だった。その言葉が少女にどれほど重い現実を背負わせているのか痛いほどによく分かる。

しかし言葉とは裏腹に、大姫は義高の服の袖を強く握りしめていた。

本当は、離れたくなかった。これが今生の別れになるかもしれないと、幼いながらも理解していたからこそ。

そんな大姫の心情を察するかのように、義高が大姫の髪を優しく撫でる。

俯いていた大姫は義高を見上げた。

これから追われる身になるというのに　大人に、殺されるかもしれないというのに、義高は晴れ晴れとした顔をしていた。

「……大好きです、義高さま」

大姫は今しかないと、そう微笑む。

彼の記憶に残る自分は、笑顔であるといい。

「私も、大姫が大好きです」

義高もまた微笑んだ。その微笑みを、一生忘れないようにと大姫は脳裏に焼き付けた。

木曾から義高と共に鎌倉に來た従者である幸氏が、少し躊躇いながら「お早く」と急かし始めた。二人はゆっくりと離れ、大姫は最後の最後に袖を離した。

「行きます」

さよならを言わない義高に、大姫はひそかに感謝した。

微笑みながら大姫は馬に乗り、徐々に遠ざかる義高を見送った。

その姿がどんどん小さくなっていき 我慢はもう出来なかった。

「義高さま！ 義高さまあ！」

もう随分と小さくなった背中に、大姫は声の限り叫んだ。

遠のいていた背中が止まる。義高が振り返ったと、夜闇の中でも分かった。

「いつか、いつの日か、姫を迎えに来てください！ 姫は待っています。いつまでも義高さまを待っていますから」

最後の方は泣き声に近かった。泣かないと決めたのに、と心のどこかで思う。

桜の花びらが、幼い二人を遠ざけるように降り注ぐ。

二人並んで花見をした時にはあんなにも美しいと感じたのに、今はその花びらが鬱陶しく感じた。義高の姿をしっかりと見ていたのに、桜が邪魔をする。

しかし、遠くの義高が手を振った。声は届いた。

約束は、確かに交わされたのだ。

幼い恋だと、大人は笑うでしょう。

けれど私には　私達には、本気の恋でした。

ほんのわずかな日々で育てた、大切な大切な想いです。

淡く散ったその恋を、どうして忘れることができるでしょうか。

あれは、私の一生をかけた恋でした。

義高が鎌倉にやってきたのは、人質としてだった。

当時大姫の父・源頼朝と義高の父である木曾義仲は衝突寸前で、

義仲が息子の義高を大姫の婿として差し出すことで和議が成立した。

幼い義高も既に自分の役割を理解していたのだろう。鎌倉に来てからは子供らしさを見せなかった。自分の評価が即ち義仲の評価になるのだと、少年は分かっていた。

敵陣の中で、弱味を見せず、凜としている彼は確かに武士だった。

そんな義高が唯一自分らしさを見せられたのは　皮肉にも敵の娘である大姫だけだったのだ。

婿というのは名目に過ぎない。そんなこと理解しているのは義高だけで、幼い大姫は純粹に義高を未来の夫として、慕っていた。

出会った、その時から。

まだ六歳の大姫に、義高という少年は随分と大人に見えた。

その少年はどこか寂しさを纏っていた。同時に、刃のような鋭さもあった。その印象を、大姫は上手く説明できなかった。

「……よしたか、さま？」

その名前を確かめるように、大姫は目の前の少年の名前を呟く。

義高は最初、年下の大姫相手にも固い表情を崩さなかった。

「はい。木曾義仲の子、義高に御座います」

膝をつき、頭を下げたまま義高は答える。

一方大姫は周囲の目に分かるほど喜んで、そして丁寧に頭を下げた。

「鎌倉に、ようこそおいでくださいました。頼朝の娘、大姫に御座います。これから末長く、よろしく願ひいたします」

六歳の少女にしてはしっかりと、不釣り合いな挨拶に義高は目を丸くした。思わず顔を上げて頭を下げた大姫を凝視する。

婿がやってくると、そう聞いた時から考えて練習してきた挨拶を淀みなく言うことができ、満足した大姫は顔を上げ、義高が驚いたまま固まっていることに慌て始めた。何か失敗してしまったのだろうか、先程とは打って変わっておどおどし始める。

「姫は、何か間違えたのでしょうか、何か」

その年相応の様子に、義高も思わず笑みを零す。

「いえ。違います。……ありがとうございます、大姫様」

礼を言われて大姫はますます混乱した。その様子が微笑ましく、頼朝や政子の前では凍っていた表情が自然と溶けた。

「こちらこそ、よろしく願ひします」

そう言って微笑む義高に、寂しさも鋭さも無い。あるとしたら、春のような優しさだけだった。

それがとても嬉しくて、大姫は大輪の花のような笑顔を義高に見せた。

「様はいりません。義高さまは姫の旦那さまですもの。ねえ、義高さま。姫に木曾のことをお話してくださいませんか」

義高さまが育った場所のことが知りたいのです。

この婚姻の裏など知らない、無垢な大姫の笑顔が義高にとっての救いだった。

大姫は日中ならはずつと義高の側にいた。義高が稽古をしている間は、大人しくその姿を眺めていた。義高も大姫を拒むことはなく二人のその様子はまるでひな人形のように、周囲の大人達はその仲睦まじい恋を見守っていた。

それでも大姫は、義高が時折見せる寂しげな雰囲気、表情に、不安を隠しきれなかった。

「……義高さま。義高さまは、木曾に帰りたいのですか？」

幼い大姫は義高は故郷を懐かしんでいるのだろつと、そう思っていた。

義高は微笑んで、大姫の髪を撫でた。

「私が木曾へ帰る時は、大姫も共に行かねばなりませんね。私の父と母に、会ってくれますか？」

義高の言葉に大姫の顔はぱ、っと明るくなった。迷うことなく大姫は「もちろんです」と笑う。

「義高さまが行くところのなら、どこへでも姫はついていきます。いつか、木曾のお父様とお母様にご挨拶させてくださいね」

姫は義高さまの妻ですもの、と最近の大姫は口癖のようにその言葉を使っていた。

そんな大姫の姿がいとおしく、そして苦しい。

「大姫」

静かに義高が呟いた。

何ですか？ と首を傾げる大姫を、義高は少し辛そうに見つめた。
「……私は、人質なんです」

私は、道具としてこの鎌倉にやって来たんです。

姫の婿としてというのは名目に過ぎない。父上が頼朝様を裏切れば、殺される存在です。

そうやって、頼朝様が父上を脅す為の道具なのです。

ここは私にとって常に敵陣です。

私はここに、戦をしにやってきた。

簡単に話し終えると、大姫がとても悲しそうに、義高を見上げていた。

「……姫も、義高さまの敵ですか？」

きゅっ、と袖を握り締められ、義高は心の底で何か温かいものが浮かぶを感じた。

「姫は、私がお嫌いですか？」

「いいえっ！」

はつきりとしたその答えを、義高は心の底から嬉しいと思った。この小さな少女がどれだけ自分を思っていてくれるのか　その強さが表れているようで。

「それならば、姫は私の味方です。木曾から共にやって来た者意外で、唯一の私の支えです」

そう言つて義高は大姫の小さな身体を優しく抱きしめた。

「姫が、姫が義高さまを守ります。お父様からも　お母様からも

」

そう必死に訴えてくる声が、今にも崩れてしまいそうな少年の心を、優しく包み込んでいた。

お互いの立場を、幼いながらに理解した大姫は、それからなお義高の側から離れようとしなかった。

目が覚めている間は義高を追い、夢の中ですら義高と共にいた。目が覚めて義高の姿を探すことから一日が始まった。

大人達から見ても、微笑ましい恋だった。

夏が終わり、秋が通り過ぎ、冬が訪れるまでは。

寒さが身に染みるようになった頃あたりから、周囲の空気が変わった。

子供というのはそういった空気の変化に敏感で、大姫も例外では

なかった。しかし何がそれを変えたのか知りようもない大姫は、ただただその雰囲気の冷たさに怯えていた。

「義仲が死んだ」

雪がちらつくある日、頼朝が義高のもとへ突然やって来て、そう言った。

大姫は隣に立つ義高の真つ青な顔を心配そうに見上げた。今にも倒れてしまいそうなほどに、顔色が悪い。

「意味は、分かるな？ 不穏な真似をすれば、そなたも父の後を追うことになる」

爪が食い込むほどに握り締められた義高の手が、震えていた。真つ青な顔のまま、唇を噛み締め、父の仇である頼朝を睨みつける。

「義高は、木曾の子です。何も恐れはしませぬ」

覚悟を決めたようなその言葉に、大姫は不安を隠せなかった。その小さな手で、震える義高の手を包み込んだ。

びくり、と義高の身体が震え、先程までの鋭い雰囲気をどこかに吹き飛ばして、戸惑ったように大姫を見下ろした。

「命は、無駄にするものではないぞ」

頼朝が低く呟き、そして義高を一瞥してその場を去った。

「よし、たかさま？」

身の内を抱える不安をそのまま音にしたような、弱々しい声で大姫は義高を呼ぶ。

いつもならこれ以上のない慰めになるはずの姫ですら、その時の義高には毒だった。

「……独りに、してください」

父の仇の娘。

今はどうしても、憎しみが愛情よりも勝ってしまいそうだった。

しかし大姫は嫌だと首を横に振り、しっかりと義高の袖を握り締める。

「姫」

握り締める手を引き剥がそうとすると、大姫は全力で抵抗してきた。

「駄目です。今義高さまを独りにしたら、きつとどこか遠くへ行ってしまう！ そんなのは嫌です。ここには姫しかいません！ 姫と義高さましかいません！」

そう叫んでしがみ付いてくる大姫を、今度は振りほどけなかった。「独りで泣くのは駄目です！ それでは悲しいのに潰されてしまいます！ 姫が、姫が側にいますから」

大姫が全てを言い切る前に、大姫よりもずっと背の高い義高が膝を折り、その小さな身体に縋るように、低く泣き始めた。その泣き声はとても小さく、それは義高の武士としての誇りを感じさせるものであった。

その義高の代わりに、大姫は大声で泣いた。義高の身体を必死で支えながら、声を上げて泣いた。

会うことの叶わなかった、彼の父を想って、義高と共にその死を悼んだ。

その時には、二人の未来がひどく曖昧なものであることに、嫌でも気づかされてしまった。

お別れの時です、と義高が切り出したのは、冬も終わり、桜の花が咲き誇っている頃だった。

いつか来ることだと、大姫も幼いながらに理解していた。けれど、納得は出来なかった。

「……行かないで下さいと申したら、義高さまは困りますか？」

潤んだ瞳で大姫は義高を見上げた。

外はもう暗く、月の光の下で桜が咲いていた。

「……困ります。大姫、私も出来ることなら、ずっと姫の側にいたい。何事も起きず、いつか祝言を挙げられたらと、そう思います」

義高がそう言うてくれることが切なかった。大姫はただ一度頷き、義高の腕に飛び込んだ。

「よしたかさま」

ぎゅ、と大姫は義高にしがみつく。

「とても短い日々でした。けれど、姫と過ごした日々は義高にとってかけがえのない宝です」

共に過ごした日々は、一年ほどしかない。

その一年のほとんどを、共に過ごした。夏の暑さを、秋の涼しさを、冬の寒さを、そして訪れる春の優しさを。

「忘れませぬ。絶対に」

義高の言葉に、大姫は頷いた。何度も何度も頷いた。

そうしてしばらく経つと、意を決したように義高から離れ、袖で涙を拭った。

「義高さま、お着替えください。女官に扮すれば追っ手の目も誤魔化せましょう。姫の衣装では小さすぎますから」

そして、逃げ切ってください。

そう言う大姫の顔は、最早七歳の少女ではなかった。

その顔は、戦に向かう夫を見送る勇ましい妻の姿そのものだった。

桜が舞い散る中、確かに約束は交わされ、大姫と義高は運命に引き裂かれた。

不安の芽である義高を、やはり頼朝は生かそうとは考えていなかったようだ。政子は随分と義高を気に入っていたから、これでも決

断を下されるまでには充分に猶予があつたのだらう。

明るかつた月は雲の中に隠れ、夜闇の中馬で駆けるのは至難の業だつた。

それでも義高は前へと進んだ。追つ手はどこまで来ているのか、逃げたことは知られたのか。色々な不安が胸を押し寄せる中、ただ一人の少女の声だけが何度も繰り返される。

敵の、しかも、仇の娘だ。

好きになんて、なるつもりはなかつたのに。

心を許すつもりなんてなかつたのに。

それでもただ独り敵陣に投げ込まれた日々で、彼女だけが救いだった。

馬が暗闇の中で大きく前足を上げる。森の中を駆けていた為か、足場はひどく悪い。そのまま義高は馬から落ち、身体のおちこちを打ち付けた。

無情にも馬はそのまま走り去る。本当にただ独りになってしまったと、義高は自嘲気味に笑った。

身体中が痛い。もうぼろぼろで、馬もいないというのに、それでも義高は歩き続けた。

木々を抜け、河原へ出る。遠くから灯りが近づいてくるのが見えた。頼朝が放った追つ手だらう。もう逃げ切ることは出来ないだろうと思ひながら、歩みを進める。しかし馬と人では結果は分かってきつていた。

義高は大姫の声を何度も何度も思い返す。

いつか、いつの日か、姫を迎えに来てください！

姫は待っています。いつまでも義高さまを待っていますから！

嗚呼、大姫。

約束は、守れないかもしれない。

ひらりと、一枚の桜の花びらが大姫の手のひらの中に舞い落ちる。

「……………よしとか、さま？」

義高を見送った大姫が、そう簡単に眠れるはずもなかった。いつもなら眠る時刻はとうに過ぎているのに、不安で眠気がやってこない。

ただ散り行く桜を眺めて、ぽつりと愛しい者の名を呟く。その名の持ち主がここにはいないと分かっているのに。

「大姫、こんな所にいたのですか。義高殿は一体どこへ」

母の政子が慌てた様子で話しかけてくる。その声が大姫に届くことはなく、大姫はただ桜の花の向こうを見ていた。

「義高さま？」

それは、虫の知らせとでも言うべきか。

「姫？」

政子が訝しげに我が子を見つめた。

嫌、と大姫が小さく呟く。嫌、嫌、とそれは徐々に大きくなっていった。

「いやああ！ 義高さまあ！ 義高さまああああっ！」

その時義高の命が、桜の花のごとく儚く散ったことを、大姫は知っていた。

それからの大姫の憔悴ぶりは、周囲の大人達も見ていられなかった。

愛らしい笑顔がよく似合う子供だったというのに、にこりとも笑わなくなった。

義高の後を追うのではという周囲の心配をよそに、大姫は悲しうに言った。

「死にたいのに、死ねないのです。だって義高さまと約束したんですもの。義高さまはいつか姫を迎えに来てくださると。義高さまとの約束を破るわけには参りませぬ。姫はずっと、迎えを待つと言ったのですもの」

幼い姫は、ただ死者の迎えを待っていた。

あの別れの時に交わした約束だけが、大姫をこの世に留めていた。義高が死して、鎌倉の者で彼のことを口にするものはいなくなっていた。

大姫はただ一つの約束を守る為に、生きていた。

幼い子供だった彼女は儚さを纏いながら美しく成長していった。目を離せば一瞬で消えてしまいそうな危うさが、大姫にはあった。そうして、大姫が当時の義高の年齢を超えてしまった頃。

「……縁談、ですか」

久方ぶりに両親に呼ばれた大姫は、その言葉を確かめるように小さく呟いた。

「ああ、最近は身体の調子も良いようだし、良い機会だ」

義高が死んでから、病がちになった大姫の身体は確かに最近が悪くない。

娘を案じての話なのだと、大人になった大姫には理解できる。けれど相変わらず、両親を前にして湧き上がるのは憎しみだけだった。「……私から義高さまを奪っただけでなく、他の男に嫁げと、そうおっしゃるのですか」

静かな大姫の声に、周囲はしんと静まり返った。

「私は生涯、木曾義高の妻に御座います。他の方に嫁ぐくらいならば海の底に沈みます。そうすれば義高さまにもお会いできる」

その方が良いと、言いたげな声に両親は縁談を進めることは出来なかった。

海の底は死者の国。

そこまで行けば、また義高に会えるだろうと、大姫は信じていた。

義高さまを殺した父が憎い。

その父を止めてくれなかった母が憎い。

そして何より 何も出来なかった自分自身が憎くて仕方なかった。

発作が起きて床に伏している時、早く死にたいと思う自分と、死ぬのが怖いと泣き叫ぶ自分が対立する。

成長し、ただの子供ではいられなくなった大姫の中に浮かぶ疑問が、一つだけある。

義高さまは、私を恨んではいないのだろうか。

何よりも尊敬していた父親を殺した男の娘で、幼さを理由に何も出来なかった非力な私を。

好きだと、そう言ってくれたあの声はもう、随分と色褪せてしまっている。

「……よしとかさま」

枕に頭を預けたまま、大姫は涙を流す。

会いたいのに、会うのが怖い。

拒絶されたら、どうすれば良いのだろう。おまえなどと詰られたら死んでも死に切れない。

桜の中で遠ざかる義高の姿だけがいつまでも鮮やかに残っていて。その花びらがいつの間にか泡となり、自分も水底にいる夢を見る。海の底なのだと、死者の国なのだとそう思っただけで義高の姿を探すが、周囲にあるのは闇ばかり。

泣き叫んでも、義高が現れることはなく、大姫はいつも夢の中で独りきりだ。

「義高さま」

死に掛けている時は、いつも義高の姿を探す。

もうこの世の人ではないと理解している。それが大姫と義高の間に大きな隔たりを作り出したということも。

ただ一つ、交わした約束だけを支えに、大姫は生きてきた。

死しても義高ならば、自分が死ぬその時に、迎えに来てくれるだろうと。そうして約束を果たしてくれるはずだと。

彼が来てくれれば　笑って逝ける。

死んで、義高の側にいることが許されるのだろうか。好きだと言ってくれたあの言葉が幻ではなかったのだと。

桜の花は散り　すっかり葉桜となっていました。

大姫は風に揺れる葉を見つめて、ただ立ち尽くした。

「大姫、そんな場所にいては身体に毒です。早く中へ」

政子が心配そうに駆け寄ってくる。母が憎いと思いつつも、その愛情を拒むことは大姫には出来なかった。

「平気です。最近は随分身体の調子が良い」

だからこそ　頼朝はまた縁談を考えているようだった。いくらそんな話を持ってきても無駄だと、大姫はため息を吐き出す。

「義高さまが夢くなつて、どれくらい経つのでしょうか。幾度も季節は巡り、私はこんなにも大きくなってしまった」

ぼつりと、寂しげに呟く娘に、政子はかける言葉がなかった。

大姫が病で寝込むたびに、口にする名ではあった。しかし普段はその名前を人前で言うことはなかった。縁談を拒んだ際に久しぶりに聞いたとさえ思ったというのに。

「……義高さまは姫に、気づいてくださるでしょうか」

大姫はその細い腕をそつと空へ伸ばす。その先には何もない。ただ木漏れ日が眩しい。

その日の夜は、ただ穏やかだった。

ただ静かに虫が鳴く中、大姫は昼間と変わらぬ場所で、今度は月を見上げていた。

満月が、強く輝き濃い影を作る。

「義高さま」

いとおしそうに呟くと、強く風が吹いた。思わず目を瞑り、一瞬の後、目を開ける。

葉桜が、満開の桜へと変わっていた。

ひらひらと、あの別れの時のように花びらが舞う。

嗚呼、と大姫は嬉しそうに微笑む。

花びらの向こうには、変わらぬ愛しい人がいた。

大姫の心があの頃へ帰る。大人のものであったはずの手は、頼りないあの頃の手に戻っていた。高かった視線が、ぐんと低くなる。

「義高さま」

呼べば迎え入れるように義高は手を広げた。その腕の中に、大姫は迷うことなく飛び込む。

「やっと、来てくださったんですね。姫は待ちくたびれてしまいました」

大姫がそう言うと、すまぬ、と言う声が返ってきた。

「いいのです。来てくださったから、いいのです。お会いしたかったです。ずっと、ずっと 義高さま」

再会の感動に、大姫は大きな瞳から涙を流す。義高は大姫の髪を優しく撫でてくれる。

私も、会いたかったよ、大姫。

どこか現実感のない声が返ってきて、大姫はその時なのだと理解する。

死ぬのは少しも怖くない。義高が迎えに来てくれたから。

ようやく、約束が果たせる。

義高の声に、はい、と大姫は答えた。

義高の胸に頬を寄せ、そのまま身体をゆだねた。心地よいぬくもりに、安心しきって。

「連れて行ってください、義高さま。これで、ずっつと、一緒です」

……」

幻の桜が咲き誇る中、二人はもう二度と離れまいと、しっかりと抱き合った。

源頼朝と北条政子の娘、大姫。正確な名前は伝えられていない、大姫というのは長女を意味する。

幼い頃の恋をそのまま温め続け、二十歳でこの世を去る。

過酷な歴史の中で、儚くも懸命に咲いた、小さな花のような一生だった。

（後書き）

みなさま読了ありがとうございました。

いつも作品を読んでくださったっている方々には「？」な作品だったかもしれません。ファンタジーでも現代恋愛ものでもない、史実に基づいた恋愛小説です。

以前に書いたものなのですが、個人的に気に入っていましたのでこうして世に出してみました。いつもとは違うジャンルなのでドキドキです。

大姫も義高も、ずっと昔の日本にいた二人です。

切ない二人の恋物語が大好きで、幸せにしてあげたいという思いからこういう小説を書きました。

ラストは様々なご意見があるかと思いますが、私としては二人とも幸せな最期であつたのだと思います。

では失礼いたします。

読んでくださったみなさまに最大の感謝をこめて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8962i/>

泡沫

2010年10月8日11時44分発行